郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史　西蓼沼

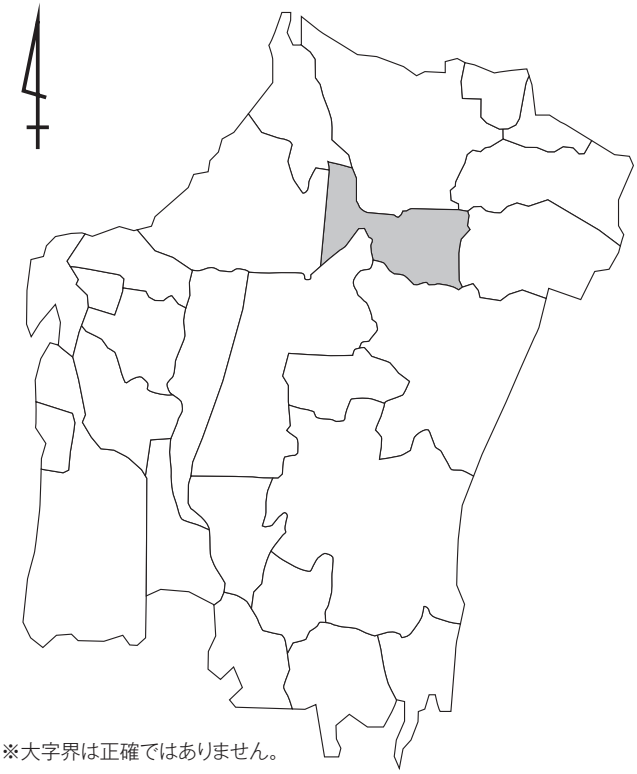
西蓼沼は、上三川町の北東部、鬼怒川右岸の低地とそれに続く台地の縁辺部に位置しています。地区の東側には雀川、中央部には江川が南流しています。西側には、磯川の水源となる仏沼があり、かつては水がコンコンと湧き出していました。江戸時代初めから宇都宮藩領で、慶安郷帳には西蓼沼村の村名がみえます。明和元年（1764）には、下総国関宿藩領（現在の千葉県野田市）であったとの記録も残っています。

当時の村の様子を知る資料もいくつか残されており、明和元年には家数38戸・人数256人、明治4年（1871）には、家数27戸・人数166人と記録されています。明治4年の村明細帳によれば、水田48町8反・畑34町6反・新田1町7反とあり、畑では大豆・小豆・蕎麦・芋・荏胡麻などを作っていました。用水堀は38筋あり、堰は33カ所に設けられていました。

地区の鎮守、村社・日吉神社（字柿）は、創建年代は不明であるものの、古来より地域の人々を見守ってきました。大祭は旧暦9月9日、小祭は旧暦2月28日に行われました。社殿のすぐ脇には神楽殿が建てられており、小祭の折に地域の人々によって太々神楽が奉納されていました。

西部の台地上には仏沼遺跡（字東通）があり、発掘調査の結果、縄文土器や弥生土器が出土しました。また、この遺跡の名称にもなっている仏沼からは、鎌倉時代初期に不動明王像が出現したといわれます。その像に霊験を感じた宇都宮家5代当主・頼綱がお堂を設けて安置したと東蓼沼の満福寺『由緒』に記録されています。

さて、ここ西蓼沼は、江戸時代には慢性的な干害に悩まされた地域だったようで、毎年堀浚い人足約500人、苗代時から8月下旬までは水番人足を昼夜10人ずつ配置するなどの干害対策がとられていました。そういった事情もあり、明和2年（1765）の日光社参の折に雀宮宿の助郷役を命じられた際には、干害による困窮から百姓が離村したことを理由に「加助郷役免除願」を出しています。明治時代に入り、西蓼沼村は合併により本郷村となりました。鬼怒川右岸の下桑島（宇都宮市）より取水した木代用水の普及、江川・雀川の用水路化によって安定して農業用水を供給できるようになり、現在に至るまで農村地区として上三川町の繁栄を支えています。



※大字界は正確ではありません。

日吉神社